

# 『科註妙法蓮華經鈔』（嘯月撰）訓読文考

小 松 邦 彰

## はじめに

本稿で考察する『科註妙法蓮華經鈔』（嘯月撰、以下、嘯月本と略称）の訓読文に注目されたのは高木豊氏である。高木氏は長年の研究課題である「法華経和歌集成」の作業過程において、多くの法華経和歌を収載する本書に着目され、その引載和歌について考察した結果を、「嘯月『科註妙法蓮華經鈔』引載和歌考」（高木豊・冠賢一編『日蓮とその教団』収）として発表されている。高木氏は本書の法華経訓読が、法華経を根本聖典とする天台宗・日蓮宗の伝統的読みと異なる特徴をもつことに注目し、自らの古稀記念に本書の真訓両読を刊行することを企図し、その解説を筆者らに委嘱したのである。よって少しく考察を試みる。

## 一、『科註妙法蓮華經鈔』について

本書の書誌的解題については、高木論攷に詳細であるが、要約して述べることとする。<sup>1)</sup>

本書題号の「科注」とは、その「惣序」<sup>2)</sup>によれば守倫注『科注妙法蓮華經』のことである。同書は『仏書解説大辞典』、田島毓堂著『法華経為字和訓の研究』<sup>3)</sup>等によれば、寛永八年、慶安二年、同四年、寛文八年、同十一年、延宝四年、同八年、天和八年、貞亨三年、元禄四年、同十年と、繰り返し出版されていることから、広く流布していたことが知られる。嘯月が本書を撰述した意図は、「此科註は真名にてあれば、なべての人読とくこともかたかめれば、そのこゝろわきまへしりかた」きゆえに、漢文体を仮名書きにし、法華経の深い教えを、「善男子善女子はいふべく

もあらづ、いやしき女わらはべ」にいたるまで、易しく知らしめようとするにあった。『科註妙法蓮華經』を仮名書きにした本書の刊本も、高木論攷<sup>5)</sup>では、

A 寛文十三癸丑歲暮三月

山本春正写

西洞院通田中町

同氏景正梓

の刊記をもつ立正大学図書館所蔵の三十冊本と、

B 山本春正写

同氏景正梓

の刊記をもつ身延山大学図書館所蔵の二十冊本の二種をあげるが、筆者はその後、

C 法華宗門書堂

京都東洞院通三條上ル町

書林 平楽寺村上勘兵衛

の刊記をもつ池上法養寺所蔵の三十冊本を確認している。さらに田島氏の前掲『訓読史略年表』<sup>6)</sup>によれば『首書絵入法華経仮名新注抄』十六冊の記載があり、『嘯月本』の異本の一種と推測されるが筆者は未確認である。

A・B両本の貼題僉は「法華経科註平かな」とあるが、C本のそれは「科註絵入法華経仮名新注抄」とある。<sup>6)</sup>

冠教授のご教示によれば、山本景正から平楽寺村上勘兵衛へ版權の移動したことは、元禄年間以後は個人の出版が認められなくなったことによるという。かように四種の刊本が相次で版を重ね刊行されていることは、本書の需要が多かったことを示すものであろう。

## 二、法華經の訓読と仮名書き法華經

法華經の日本への伝来は敏達天皇六年（五七七）に確認されるが、しかしそれ以前の仏教伝来（五三八年）と同時とみてよいであろう。日本における法華經（のみならず仏典のすべてに共通）の受容は漢訳であったこと、すなわち漢文のままて和訳、日本語訳されなかったことが大きな特色である。したがって法華經の註釈書も、聖徳太子の『法華義疏』、最澄の『註無量義經』『法華秀句』等、円珍の『觀普賢經記』『法華論記』『講演法華儀』等、いずれも漢文で執筆されている。和文による法華經の講説は鎌倉時代によりやくみられるが、同時代の貞慶の『法華開示鈔』は漢文であり、日蓮聖人の『觀心本尊抄』『法華取要抄』等も漢文である。

法華經の訓読も音読（真読）であり、呉音が百濟經由で伝来されてよりそれに従い、奈良時代に漢音が伝来しても、統一されないまま今日まで呉音・漢音が併用されている。

訓読についてみると、兜木正亨氏によって古くは奈良時代に四点の記録をみ、平安時代には訓本を訓經と呼んだといわれ、鎌倉時代には版經の仮名書き法華經の遺品もみえることが指摘されている。<sup>8</sup> 田島氏も訓読法華經と仮名書き法華經について概観している。<sup>9</sup>

法会における訓読は音読（真読）でよいかもしれないが、經の意味内容を理解しようとするとき、音読では經典をみながら一々文々にゆっくりと読むならともかく、訓読による方が勝れていることはいうまでもないであろう。ゆえに經の意味を理解する手段として訓読（読み下し）はすでに古く奈良時代から行われていたのである。中田祝夫氏も、仮名書き法華經は専門僧侶のためではなく、少しく文字を解する在家の者、智識人、武士やその家族、女人などに、法華經を易しく理解するために作成されたものであろうと述べている。<sup>10</sup>

法華經の訓読の場合、訓点いわゆる「オコト点」を付した訓点本と、読み下しにした仮名書き本とある。仮名書きといっても六頁の引用にみるように、多くは漢字仮名交り文である。また仮名書き法華經には、音読（真読）をそのまま仮名にした真読本もあり、日蓮教学研究所にも本満寺本、長保寺本等、数点の影印本を所蔵している。

訓点本、仮名書き本とも田島氏の前掲「略年表」に整理されている。ここでは嘯月本と比較対照した諸本について、兜木・田島両氏の研究等を参照しつつ、その特色を指摘しておく。

『妙一記念館本仮名書き法華経』(妙一本。「妙」と略記)は、中田祝夫氏によれば、鎌倉時代中期の成立で、化城喻品末尾に江戸時代の補筆があるほか、ほぼ完備している。本書の特色は、漢字に振り仮名を付し、「安詳」に「やうやく」、「歓喜」に「よろこぶ」、「勇猛」に「いさみたけく」のように、左注に語の意味を付していることである。

同じ中世写本である『足利本仮名書き法華経』(足利本。「足」と略記)については、「鏝阿寺本」として兜木氏の論致があるが、第一巻末尾に「元徳二庚午閏六月廿四日 句切已」とあることから、その成立年代は明かである。但し本書は分別功德品、如来神力品、嘱累品の三品を欠いている。

中世の仮名書き法華経でほぼ完本に近いのはこの二点で、田島氏の「略年表」によれば「月ヶ瀬文庫本八冊」があるというが未刊で、他に瑞光寺本(如来寿命品から妙音菩薩品までの巻六・巻七)、天理図書館本(巻三)等がある。近世に入ると正保四年に『和訓法華経 八冊』が開版されているが未見。次で本書「嘯月本」が寛文十三年の開版となる。

次に『倭点法華経』等の四本は訓点本である。

『倭点法華経』(「倭」と略記)は嘉慶元年の刊行で、巻八巻尾の跋文によれば、心空が僧侶男女のために、漢音に通じていなくても内容を理解できるように、訓点を付して広く流布せしめようとしたものである。仮名書きにはしないが、読誦のためのものでなく、内容を悟らせ、法華経に親しませようという意図したものである。

身延山二十二世の心性院日遠(一五七二—一六四二)は多くの訓点本や仮名書き本を比較検討し、慶長十七年四月『文段法華経』(「文」と略記)一〇巻を編集した。巻一の巻末に付された

夫為直談経旨於諸文取有便章句以書加之文段下又集諸点本從其善者若有所不安頗為改易之欽希後賢改削耳  
(夫れ経旨を直談せんが為に、諸文に於て有便の章句を取り、以て之に付き加う。文段の下、又諸の点本を集め

て、其の善者に従う。若し安せざる所有るは、頗る之を改易す。飲んで後賢の改削を希うのみ)

慶長十七龍集壬子孟夏首 沙門日遠

との刊記によれば、日遠は法華經本文に関する論疏の要文を抄録注記し、さらに諸本を対校し音点と点を付し、私見により従来の読みを改め、本書を編んだというのである。すなわち智顛の『法華文句』を中心に諸論疏を引用注記して経意を理解せしめ、また読みにも意を用いて法華經の読誦、習学に便を計ったのである。日遠は法華經の和訳普及に努め、『文段經』の他に、『法華經大意』二卷、『法華經和談抄』八卷等を著し、さらに和訳や音義に関する諸問題について『法華經随音句』二卷、『法華經訳和尋迹抄』三卷として著したのである。

日蓮宗の訓読は、日遠の『文段經』の読みが頂妙寺版に採用されてから広く流布することとなった。天保五年に上妙院日瞻(一八〇〇—一八六八)は『文段經』をもとに『頂妙寺版妙法蓮華經』八卷を刊行し、文久元年には板木磨滅のゆえに日穩が第二版を刊行。さらに明治十八年に水野日頭が第三版を刊行したが、この時、改訓が行われた。現行の頂妙寺版である。<sup>15)</sup>

明治十三年、新居日薩(一八三〇—一八八八)が『大教院版妙法蓮華經』八卷を刊行した。日薩は師日輝が訓読を用いたことから訓読を重視し、跋によれば訓読の善本が少ないゆえに諸本を参考し、折衷刪補して刊行したという。

島地大等著『漢和对照妙法蓮華經』(「島」と略記)の訓読は、「刻経縁起」によれば「和訓は古來慈覚大師の点訓と伝ふるものに拠る」とある。しかし田島氏は「頂妙寺版の天保版あるいは文段經を下敷にしている」と指摘されている。<sup>16)</sup>

法華經普及会編『真訓両読妙法蓮華經』(「平」と略記)は、跋によれば島地大等の前掲書の流行により、日蓮宗の法華經読誦が乱れたのを正すため、真読は日相本により、訓読は現時最も流布せる頂妙寺版の訓点(明治の改刻)により、これを延書きとしたという。日蓮宗の訓読は、日遠『文段經』——頂妙寺版——平楽寺版と継承されていることが解る。

天台宗においては、法華經の山家読みは口伝によったといわれるが、慈海末順(一一六九五)による『慈海版法華

『經』が元禄五年に刊行されてから、その伝統が消滅しかけていたといい、江戸後期それを嘆いた伊勢西来寺の真阿宗(一七八六—一八五九)が、山家読みの法華経を編纂し、『山家本法華経』として天保十一年開版した。宗淵は対校に用いた七五本につき、その要点を記した『法華経考異』を著している。また西来寺には三井宗湛(一一八三八)が寄贈し、宗淵が他の写本と校合し、書き入れをした『仮名書き法華経』が所蔵されている。<sup>(20)</sup>本書と佼成図書館所蔵の『仮名書き法華経』は『嘯月本』(寛文十三年)以後であるゆえ、対照の資料としなかった。

### 三、嘯月本と諸本の対照

次に嘯月本の訓読の特色を明かにするため、『妙一本』『足利本』『倭点法華経』『文段経』『島地本』『平楽寺本』の五種と対比してみる。方便品・見宝塔品・如来寿量品・妙来神力品(『足利本』は欠く)・薬王菩薩本事品の五章の周知の一節を左に掲げる。嘯月本の特色を示す箇所傍線を付した。

#### 方便品

(妙)そのときに世尊三昧より安詳としてたちて舍利弗につけたまはく諸仏の智慧甚深無量なりその智慧の

門難解難入なり

かどさとりかたくいりかたき

(足)その時に世尊三まいよりあんしやうとしてたちてしやりほつにつけたまはく諸仏のちえしんしむ無量なりそのちえのかとさとりかたくいりかたきなり

(倭)爾の時に世尊三昧より安詳として起ち舍利弗に告下はく諸仏の智慧は甚深にして無量なり其の智慧の門は解し難く入り難し

(文) 爾時に世尊三昧より安詳として起て舍利弗に告下はく諸仏の智慧は甚深無量なり其の智慧の門は難解難入なり

(嘯) そのときにせそんさんまいよりあんじやうとやすくしづやかにしてしかもたちしやりほつにつげたまはくしよぶつのちえははなはだふかくしてはかりなきなりそのちえのもんはさとりがたくいりがたし

(鳥) 爾の時に世尊三昧より安詳として起ちて舍利弗に告げたまはく諸仏の智慧は甚深無量なり其の智慧の門は難解難入なり

(平) 爾の時に世尊三昧より安詳として起つて舍利弗に告げたまはく諸仏の智慧は甚深無量なり其の智慧の門は難解難入なり

見宝塔品

(妙) この経はたもつことかたしもししばらくもたもつものはわれすなはちくわんき歡喜す諸しよぶつ仏もまたしかなり

(足) このきやうはたもつことかたしもししばらくもたもつ物はわれすなはちくはんきす諸仏もまたしかなり

(倭) 此の経は持こと難し若し暫も持つ者のは我即ち歡喜す諸仏も亦た然なり

(文) 此の経は持こと難し若暫も持つ者のは我即ち歡喜す諸仏も亦然なり

(嘯) このきやうをばたまちがたしもししばらくもたもつものをばわれすなはちくわんきしよろこぶしよぶつもまた

しかなり

(島) 此の経は持つこと難し若暫くも持つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦然なり

(平) 此の経は持ち難し若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦然なり

如来寿量品

(妙) われほとけをえてよりこのかたへたるところのもろもろの劫数無量こうしゆわりやうひやくせんまんおくさいあそうぎ百千萬億載阿僧祇とのかずなりつねに法をときて無数億の衆生を教化して仏道にいらしむ

(足) われほとけをえてよりこのかたへたるところのもろもろのこうしゆ無量百千萬億さひあそうきなりつねに法をときてむしゆをくのしゆしやうをけうくえして仏道にいらしむ

(倭) 我れ佛を得てより来た経たる所の諸の劫数無量百千萬億載阿僧祇このかなり常に法を説て無数億の衆生を教化して佛道にいらしむ

(文) 我れ佛を得てより来た経たる所の諸の劫数無量百千萬億載阿僧祇このかなり常に法を説て無数億の衆生を教化して佛道にいらしむ

(嘯) われほとけをえてよりこのかたへたるところのもろもろのこふのかずわりやうひやくせんまんをくさいあそうきなりつねにみのりをときてむしゆおくのしゆじやうをけうけしてぶつどうにいれしむ



(鳥) 我佛を得てより来経たる所の諸の劫数無量百千萬億載阿僧祇なり常に法を説きて無数億の衆生を教化して佛道に入らしむコノカタ

(平) 我佛を得てより来経たる所の諸の劫数無量百千萬億載阿僧祇なり常に法を説いて無数億の衆生を教化して佛道に入らしむ

如来神力品

(妙) このゆへになんたち如来滅後にまさにこころをひとつにして受持読誦解説書写し説のこたく修行すへし所在の国土にもし受持読誦解説書写ししゆちとくしゆけせつしよやうげたまちよみと きかきうつし

(足) (欠)

(優) 是の故に汝等如来の滅後に於て应当に心一にして受持読誦し解説書写し説の如く修行すへし所在の国土に若し受持読誦し解説書写し

(文) 是の故に汝等如来の滅後に於て应当に一心に受持読誦解説書写して説の如く修行すべし所在の国土に若は受持読誦解説書写して

(嘯) このゆへになんちらによらいのめつごにおいてまなにいっしんにじゆちどくじゆしげせつしよしやしてせつのごとくにあらゆるところのこくどにしゆぎやうすべしもしはじゆちどくじゆげせつしよしやして

(鳥) 是の故に汝等如来の滅後に於いて应当に一心に受持読誦解説書写して説の如く修行すべし所在の国土に若は受持読誦解説書写して

(平) 是の故に汝等如来の滅後に於て应当に一心に受持読誦し解説書写し説の如く修行すべし所在の国土に若しは受持読誦し解説書写し

薬王品

(妙) わか滅度ののちのちの五百歳のなかに閻浮提に広宣流布して断絶せしめ悪魔魔民もろもろの天龍夜叉鳩槃荼等をしてそのたよりをえしむることなかれ

(足) わかめつとの後の五百さひの中にえんふたひにくはうせんるふしてたんせつせしめあくまみんもろくのてんりうやしやくはんたとうをしてそのたよりをえしむることなかれ

(倭) 我が滅度の後ち後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしめて悪魔魔民諸天龍夜叉鳩槃荼等に其の便りを得せしむること無かれ

(文) 我が滅度の後後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶して悪魔魔民諸の天龍夜叉鳩槃荼等に其の便りを得せしむること無かれ

(嘯) わがめつどののちごひやくさいのうちひろくのべるふしてえんぶだいににおいてあくまみのたみもろくの

てんりうやしやくはんだとうをだんぜつしたへしてそのたよりをえせしむることならかん

(島) 我が滅度の後後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶して悪魔魔民諸の天龍夜叉鳩槃荼等に其の便を得せしむること無かれ

(平) 我が滅度の後後の五百歳の中閻浮提に広宣流布して断絶して悪魔魔民諸天龍夜叉鳩槃荼等に其の便を得せしむることなかれ

右に掲げた五章の、しかも僅か一、二行の対比で『嘯月本』の特色を論ずることは余りに早計であるが、右の対比だけでも『嘯月本』の訓読は読誦のためではなく、法華経の経意、内容を理解させるための読み下しであることは確かである。『嘯月本』は仮名書き本の『妙一本』や『足利本』、訓点本である『倭点法華経』や日蓮宗系の『文段経』『平楽寺版』等とは、かなり異なった本文であることは明白である。『嘯月本』は「甚深無量」を「はなはだふかくしはかりなきなり」、「難解難入」を「さとりがたくいりがたし」の如く漢字を読み下し、そのみならず『妙一本』が左注に加えた語訳を、「歡喜」を「くわんぎしよるこぶ」、「勇猛」を「ゆみやうといさみてたけく」の如く、本文に入れ読み下していることも特色の一として指摘できようし、撰者嘯月の「いやしき女わらべ」に至るまで知らしめようとの意図をそこにもみることが出来る。撰者の嘯月が本書を編むにあたり、訓読本であれ仮名書き本であれ、先行の天台、日蓮両宗のいずれを参照したかは不明である。右の僅かな対比から強いて類似を求めれば『妙一本』に近いかともみられるが、全文にわたっての対比検討を経た上でなければ簡単には結論を下しえない。今後の課題としたい。しかし、いずれにせよ高木豊氏が企図した本書『嘯月本』の刊行は、法華経の訓読、訓読史を考える上で意義あることといえよう。(平成十一年十一月廿四日、日教研例会)

註

- (1) 高木豊稿「嘯月『科註妙法蓮華經鈔』引載和歌考」(高木豊・冠賢一編『日蓮とその教団』収。三一九頁以下)
- (2) 『科註妙法蓮華經鈔』第一冊二丁ウ
- (3) 田島毓堂著『法華經為字和訓の研究』付録「法華經訓読史資料略年表」一二七八―九頁
- (4) 『科註妙法蓮華經鈔』第一冊二丁ウ、三丁オ
- (5) 高木前掲論攷三二〇頁
- (6) 同書では「法華」を「法花」、「仮名」を「かな」「か奈」と記す冊もある。
- (7) 薬恒『法華験記』の記述が『扶桑略記』巻二一・二二に引載されている。
- (8) 兜木正亨著『法華版経の研究』一七四頁
- (9) 田島前掲書第十章「訓読法華経と仮名書き法華経と」一〇六七頁
- (10) 中田祝夫編『足利本仮名書き法華経』影印篇九頁
- (11) 中田祝夫編、五卷(影印篇上下、翻字篇、研究篇、索引篇)。昭和六十三年、靈友会刊。影印篇下巻解説。
- (12) 中田祝夫編、三卷(影印篇、翻字篇、索引篇)。昭和五十一年、勉誠社刊。
- (13) 兜木正亨著『法華版経の研究』四七二頁
- (14) 正宗敦夫編の昭和九年十一月刊の日本古典全書刊行会の上下二冊本による。下巻に岡田希雄氏の解説「心空上人の三著書に就て」を付す。
- (15) 昭和四十八年一月刊の本満寺本による。巻末に兜木正亨氏の解説を付す。刊記は同書一一〇頁。読みは兜木氏に由る。
- (16) 昭和四十一年に布施浩岳氏により梵本と対照し改訂が行われ「新頂妙寺版」という。
- (17) 大正三年、明治書院刊。昭和六十二年、国書刊行会復刻
- (18) 田島前掲書、一〇七一頁
- (19) 昭和二年、平楽寺書店刊
- (20) 木村晟・近藤良一・萩原義雄編『西来寺蔵仮名書き法華経(影印篇)』(平成五年刊)
- (21) 田島毓堂編『佼成図書館蔵法華経和歌付き仮名書き法華経の研究(影印篇)』(平成一〇年刊。なお佼成図書館にはこの他に

三種の仮名書き法華経が所蔵されている（田島前掲「略年表」）

（付記）法華経の版経や訓読について素人の筆者が本稿執筆にあたり、兜木正亨著『法華版経の研究』、田島毓堂著『法華経為字和訓の研究』、坂輪宣敬著『和訳法華経』の三書に負う所大である。記して学恩を謝するものである。

なお嘯月本の刊行を企図された高木豊氏は本年五月十日急逝された。謹んで高木豊先生・厳浄院篤学日豊大居士の御冥福を祈念いたします。